花咲く海

春菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花咲く海

【Ｎコード】
Ｎ４３１９Ｚ

【作者名】
春菜

【あらすじ】
Ｍｏｒｅ　Ｔｉｍｅｓの続編。余命宣告をされた彼女、美樹は一週間の思い出を胸に入院する。病院で出会った男、翔にささやかな願い事を叶えてもらううちに親しくなっていく。生と死の狭間を何度も彷徨う美樹。そんな美樹に翔の思いは？美樹の思いは？ラブストーリー。

入院（前書き）

お時間がありましたら、前作Ｍｏｒｅ　Ｔｉｍｅｓからお読みください。

入院

あと半年しか生きられないと宣告されるということ。
それは「あと半年間は心配なく生きられますよ」という意味ではない。
「少なくともあと半年は病気と闘わなければいけませんよ」という意味だ。
恋人か、子供でもいれば「あと半年しかないのか」と焦りもしただろうが、体中から襲い来る痛みと薬の副作用に苦しむ身としては「まだ半年もあるのか」と半ば諦めにも似た気分でいた。
心の中にまだ僅かに残っていた生きるための希望が失われた中で、唯一灯っていた光があった。
私が生まれて初めて本気で好きになった人。縋るようにその人の住む街へ一人で旅に出た。
担当の医師である青葉先生と両親に頼み込んで一週間という猶予を貰った。そしてその最後の一日に彼と会うことができた。
だが、長い闘病生活で痩せ細った体はたった一週間の旅行にも耐えられず、私は予定よりも早く病院のベッドに沈むこととなった。
それでもその一週間は、これから先に少しでも残っていた自由を差し出す価値のある時間だったと思う。
「お姉ちゃん、大丈夫？」
ぼんやりしていた私の顔を妹の理沙がそっと伺い見る。
涙脆い母親といると気を使うし、人の痛みに鈍い父親は私が辛い時でも励ましの言葉をくれることはない。
家族の中で理沙だけが私の支えだ。
「うん、平気。」
入院の手続きを済ませ、個室に案内された私の荷物を理沙が片付ける。
最初にカバンから出された服を差し出され、まずそれに着替えて、

脱いだものを畳んだ。
その僅かな時間に鞄の中の荷物は棚や引き出しに手際よく仕舞われ、空いた鞄に私の脱いだ服が入れられる。
「洗濯くらい自分でするのに。」
「いいよ、私のついでだから。」
慣れた手つきで私のベッドの周りが整えられていく。
点滴やナースコールなどの邪魔にならないように置かれたティッシュボックス、トイレに行くときや吐き気を催したときに使うタオルはすぐ手の届くところ、
水のボトルはベッドサイドの棚に並べられ、その前にコップが伏せて置かれている。その横には薬を入れるケース。
ベッドの柵にはゴミ袋、財布と携帯電話を入れて持ち歩く巾着袋が棚の横に付けられたフックからぶら下がっている。
入院するのは初めてではない。検査や治療で何度か経験している。
その間に配置を覚えてしまったのだろう。
「理沙はかしこいね。」
「うん、知ってる。」
謙遜することもなく、愛想笑いも浮かべずにいつもの涼しい顔をして理沙が答える。
私はそんな彼女をベッドに座って眺めていた。

自殺未遂

私の病気が発覚したとき、私は高校生、妹は中学生だった。
学校の健康診断で再検査になり、病院に行った。医師は
「ご家族と一緒にいらして下さい。結果はそのときお話します。」
と言った。私がその必要はないと言っても何も答えてもらえなかった。
次に行ったとき、診察室で聞かされた病名は全然聞き慣れない言葉で、耳に入らなかった。入っても理解できなかった。
病気について説明を聞き、自分の体が今どうなっているのかをぼんやりと理解した直後、死ぬ可能性のある病気だと言われた。
脳に鉛をぶち込まれたみたいな衝撃だった。
一緒に聞いていた母親は泣き出し、理沙は私の肩をぎゅっと掴んだまま、そんな母の背中を擦った。父親は医師に話を進めるよう促した。
完治する見込みは薄い、再発の可能性もあると後ろ向きな発言ばかりを重ねる医師の言葉を真に受け、自暴自棄になった。
どうせ治らないならと治療もろくに受けず、遊び回っていた。
何かと言えば死ぬだの死ねだの連呼する同級生たちが馬鹿みたいに見えて、高校を退学した。
暇だったから仕事も幾つかしてみたけれど、続かなかった。
日が経つにつれて無視できなくなる痛み。病院でもらった薬を飲んでも収まらず、理沙に背中を擦られたり、手を握って貰いながら呻く私を見て母はいつも泣いていた。
父はきちんと治療をしない私を叱るばかりだった。
「世の中には病気にかかっても、治療を受けられない人もいるんだ。」
そんなことを言われたところで納得できるはずなどなかった。
じゃあ、私の治療費をその人たちにあげたらいいじゃない。私の受

ける治療を代わりに受けさせれば？
私だって苦しい。薬を飲んでもどうせ治らない。痛みすら消えないのに、頑張る必要があるの？
「お前がちゃんと病院に連れて行かないからだ。」
ついに泣いている母まで責め始めた父。それを困った顔で優しく宥める理沙。
その様子をどこか遠くから他人事のようにぼんやりと見ていた。
体がどこかに置き去りにされたような感覚の中で私は呟いた。
「こうなってしまった原因が消えてしまえば、みんな泣きも怒りもしなくていい。」
気が付いたときにはベランダの柵によじ登って身を乗り出していた。
我に返って見下ろすと、理沙が私の足にしがみついてぶら下がるようにして泣いていた。
「お姉ちゃん、死なないで。あたし、大丈夫だから、何でもするから、頑張ろうよ。」
涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔。私に押し退けられ、蹴られてボロボロになった髪と服。
何とも哀れな姿だった。聡明で利発な妹をこんな姿にさせてしまった自分に憎しみが湧いてきた。
同時に私の病気を知ってから感情を露わにすることがなくなっていた理沙にここまでさせてしまったことを申し訳なく思った。
「ごめん、ごめんね。」
私たちは抱き合って泣いた。誰にも遠慮せず、大声を出して、涙をボロボロ溢して泣いた。
そして泣き疲れて同じベッドで眠った。
その寝顔に私は言いようのない感謝を込めて、決意した。
もう弱音を吐いたり、泣くのはやめよう。理沙のために、私に出来る精一杯のことをしよう。
翌日、理沙の薦めもあって私は通う病院を変えた。
「あの先生はお姉ちゃんには合ってないと思う。」

紹介状を持って、こじんまりとはしているが設備の整った病院に行った。
青葉と名乗る医師は若くて抜けたところがあるようだが、なかなか私に合った医師だと思った。
そして苦しく長い闘病生活が始まった。
検査を受けた結果、以前より確実に病気が進行しているということが明らかになった。
青葉先生は私が尋ねれば包み隠さず話してくれた。わからないことはわかるまで説明してくれた。
そこでわかった。私は若い分、病気の進行が早いということ。そして、同じ理由から手術と薬物投与で治る見込みが高いということ。
その事実を聞かされた私は理沙に支えられ、治療も上手く進んでいたこともあって普通の十代と変わらない明るさを取り戻した。

新しい出会い

機械を使っての治療、検査、点滴、食事、薬。入院してから私の一日はそればかりになった。
自分を生かすこと。それ以外にやることがない。できることは何もない。
病気と闘っている間にそれまで付き合いのあった友達はみんな離れていった。
芸能人に興味がなくなってからはテレビを見なくなったので、流行に疎くなってしまった。
体力のないこの体ではできることも限られてしまうので趣味と呼べるものもない。
毎日、暇をもて余しては旅行のときに撮った写真を眺めていた。
理沙が印刷して小さなアルバムに入れ、持ってきてくれたのだ。
どれも味気ないくらい当たり前の風景ばかりだった。
空、雲、花、街、料理、犬、猫などなど。唯一、旅行らしいのはホテルの部屋くらいか。
「お姉ちゃんの好きな人が見られると思って楽しみにしてたのに。」
これを持って来た時、理沙がそう文句を言っていたのを思い出しながら笑った。
彼と一緒に写真を撮ったのは随分前に一枚だけだ。パソコンの中に眠っている。そういえばまだ理沙に見せたことなかったな。
病室のドアがノックされて看護師さんが顔を覗かせた。
「美樹ちゃん、今いい？」
「はい。大丈夫です。」
「青葉先生がちょっとお話しましょうって。行けますか？」
私が頷くと看護師さんは車椅子を持ってきて、私を診察室前まで運んだ。
担当医の青葉先生がいる部屋の前で少し待たされることになった。

不意に大好きな彼の顔が頭に浮かんだ。辺りを見回しながら彼と同じ匂いがしているのだとわかった。
待合室に座っている男の人がどうやら彼と同じ香水をつけているらしい。
いるはずがないとわかっていながら、少し期待してしまった自分にがっかりしているとその人と目が合ってしまった。
その人はぎこちなく微笑んで近付いてきて私の手元を指差した。
「それ、何の写真ですか？」
そこでやっとアルバムを持ったまま来てしまったことに気付いた。
「旅行のときの写真です。見ますか？」
アルバムを手渡すと、その人は一瞬だけ笑ってその後は黙って写真を眺めていた。
一枚一枚をじっくり見ているその人の匂いを堪能していると看護師さんが私を呼んだ。
「美樹ちゃん、どうぞ。ごめんね。待たせちゃって。」
「いえ、大丈夫です。」
何ならもう少し待っていてもよかったのに、と思いながら私は相槌を打った。
看護師さんに車椅子を押されて立ち去ろうとする私を、男の人は追いかけてきた。
「あの……これ、お返しします！」
「見てていいですよ。貸しますから。」
そう言って手を振ると、その人は嬉しそうに笑って頷いた。
診察室に入ると青葉先生がこの前の検査で撮った写真を見ていた。
「こんにちは。」
「ごめんね、いきなり呼んだりして。」
「いいですよ。どうせやることなくて暇だし。」
私があっさりそう言うと青葉先生がくるりと振り向いた。いつもと変わらない顔をしようとしているのがわかる。
だけど頬にも眉にも変な力が入っているのがわかる。多分、私が待

たされたのは青葉先生に心の準備をする時間が欲しかったからだろう。
「言いにくい話？」
「そうだね……。」
「じゃあ当てるよ。予想してたより進行が早いんでしょう？」
いきなり核心をつかれた青葉先生は渋い顔をして頷いた。
「これから痛みや、吐き気はもっと強くなる。
旅行や遊びには行けないと思ってください。もしかしたら、家に帰ることも……。」
青葉先生はそこで言葉を切った。視線が震えている。助けられない患者を見るのはつらいが、目を逸らすのも怖いんだろう。
私は言った。
「もう大丈夫だよ。ごめんね、先生。」
「そんな……頑張ったのは全部美樹ちゃんだよ。」
「ううん。ちゃんと話してくれてありがとう。」
私が深々と頭を下げると、先生が小さく鼻を啜ったのが聞こえた。
泣きたいのを堪えてるんだろう。
何年もの間、最善と思われる手を尽くしてきた患者が自分より若くして死んでいく。
助けられると信じてきたのにそれも叶わず、今は奇跡を願うしかないなんて……。
診察室から出て行くと、看護師さんが待ち受けていて車椅子の操縦を代わってくれた。
話の内容を知っているのか、詮索はせずにただ一言
「お疲れ様。」
笑顔でそう言ってくれた。
待合室を通って帰ろうとしていたらあの男の人に声をかけられた。
「アルバム、どうもありがとう。綺麗な写真ですね。」
「ありがとう。気に入りましたか？」
「はい。とても。僕も行ってみたくなりました。」

その人は屈託のない笑顔でそう言った。
笑った目が彼にそっくりだと思った。匂いのせいで錯覚しただけかもしれないけど。
手の中に返されたアルバムを握り直し、その人の胸元に押し付ける。
「あげます。焼き増しできるから、私はまた新しいの作ります。」
突然のことに戸惑いながらもその人が再びそれを受け取ったのを確認して私は車椅子を進ませた。
部屋に戻ってから、あれはただのお世辞だったのではないかと思った。
実は私と目が合って気まずかったから話題を作ろうとしてアルバムを指差しただけで、写真には興味がなくてもう捨てられてるかもしれない。
彼と同じ匂いがしたから舞い上がっていたけど、初対面で名前も知らない。
入院してる服装にも見えなかったし、外来かお見舞いだろう。
どちらにしても既に帰ってしまったはずだ。取り返しには行けない。
次はいつ来るかもわからない。
「諦めて新しいの作ってもらおう……」
私は溜息をついた。

カウントダウンの始まり

それから一週間ほど過ぎた頃のことだった。
「こんにちは。」
昼食の後、青葉先生が来た。
心なしか声がうきうきと弾んでいるような気がする。
「先生、どうしたの？」
「きちんと食べたみたいだね。偉い、偉い。」
子供じゃないんですけど。と思いながら訝しげに青葉先生の顔を見上げる。
すると、白衣の大きなポケットからかわいい猫の絵が描かれた缶を取り出した。
「これを美樹ちゃんに届けに来たんだ。」
「え、これ、先生が？」
「いや。うちの外来を受けてる人に『これ、美樹ちゃんって子に渡してください。』って言われたの。」
「それって先生より少し若い男の人？」
「そう。写真のお礼だって言ってたよ。知り合い？」
私は頷いた。缶はかわいくラッピングしてあって、中に小さな手紙が入っていた。
そこには手書きであの男の人の名前と、感謝の言葉が書かれていた。
「先生、その人にまた会いますか？」
「うん？受診に来れば会うよ。担当だからね。」
「じゃあ、渡してほしいの。」
私は慌てて手元にあった紙の一枚に自分の名前と病室の番号を書いた。
二つ折にして先生に渡す。
「何か楽しそうだね？いいね、若い人は。じゃあ、伝書鳩は行きますよ。くれぐれも安静にね。」

青葉先生はにやにやと笑いながら部屋を出て行った。
私もにやついていた。
勝手に捨てられて、忘れられたと思い込んでいただけにこの手紙は嬉しかった。
私は手紙を開いて改めてそれを読んだ。
『こんにちは。先日は写真をありがとう。見る度に、大事なものだったのでは？と不安に思い、返そうと思いましたがせっかく貰ったものですので大切にします。本当にありがとう。翔より』
読みやすい綺麗な字だった。名前はカケルだろうか、ショウだろうか。
外来に来ている、ということは体のどこかが悪いんだろう。
私のような重い病気ではありませんように、とあてもなく祈る。
缶の中身はキャンディだった。カラフルな作り物みたいな丸いキャンディが缶に詰まっている。
一粒、口の中に放り込んでベッドに寝転がった。
手紙を何度も読み返す。
大好きな彼から手紙が来たみたいだ。
彼は私の住所を知らない。私が今どうしているのかも知らないのに、と思うと不思議な気分だ。
だけど、夢くらい見てもいいよね。
私はそのまま眠ってしまっていたようだ。気付くと理沙がいた。
「あ、来てたんだ。」
寝ぼけ眼で声をかけると、理沙は怒ったように言った。
「昨日からいたよ！」
涙声になっている。よく見ると目が潤んで真っ赤になっていた。
周りを見ると、眠る前にはなかった機械が横で音を立てている。
腕にも覚えのない点滴や、機械に繋がる器具が装着されていた。
口から酸素マスクを外して起き上がろうとすると、ナースコールで駆け付けた看護師さんにとめられた。
理沙が言うところによると、私は丸一日目を覚まさなかったらしい。

まるで眠っているかのように静かで、様子を見に来た看護師さんも最初は気付かないほどだった。
理沙が来たときには既に処置が済んでいて、夜通しずっと傍にいてくれたようだ。
「もう、目を覚まさないのかと思った……」
「ごめん、寝過ぎたね。」
ベッドにもたれかかる理沙の頭を撫でる。安心して気が抜けたのか、理沙はそのまま眠ってしまった。
ドアがノックされて青葉先生が顔を出した。
問診と共に目の色や体温、血圧のチェックをした後、青葉先生は理沙を起こさないように静かに話し始めた。
「脳に与えられる刺激が予想より大きいみたいだ。薬をもう少し弱いものに変えよう。症状は他の薬でコントロールするから心配ないよ。」
「これからも意識を失ったり……目が覚めなかったりすることはありますか？」
「なるべくないようにする。だが、美樹ちゃん自身の体力の問題もある。約束は出来ないよ。」
「私の気持ち次第、ですね。」
青葉先生が頷いた。私は力なく微笑んで、目を閉じた。
死が足音を立てて近付いてくるのを感じる気がした。

現実

その日から私の状況は一変した。
まず、自力で立って歩くことが難しくなった。
足に力が入らない。入っているはずなのに自分を支えられない。
まるで他人の足を付けたみたいに思い通りにいかない足ではバランスが取れず、トイレに行く僅かな距離で何度も転んだ。
次に眠る時間が長くなった。
朝の検温や血圧測定ではほとんど目を覚まさない。
ぬるま湯に浸かったようなまどろみの中で薄く残った意識だけが今の様子を捉えている状態だ。
朝食が運ばれるまでには目を覚ますのであまり生活に支障はないが、一度昏睡状態を経験した身としてはその心地好さは恐ろしくもある。
それから、食事がほとんど喉を通らなくなった。
喉の奥で何かがせき止めているかのように、口に入れた物が飲み込めない。
青葉先生がすぐに食事のメニューをお粥と噛まなくてもいいくらい柔らかく調理されたおかずにしてくれたけど
結局、それも吐いてしまう。
食事は苦痛だった。
それでも弱音を吐きたくはなかった。
なるべく笑っていたかった。
青葉先生は仕事の合間を縫って病室に顔を出してくれた。
問診のために来ることもあったけれど、ベッドから自由に動き回れない私に面白そうな話題を聞かせに来てくれることがほとんどだった。
「今日はいいお知らせがあるよ。」
青葉先生は小さく「クルックー」と言ってポケットから小さな紙を取り出した。

「カケルさんからお預かりしてきました。」
その名前を聞いた瞬間に、小さな手紙に書かれた文字と甘いキャンディの味が頭の中いっぱいに広がった。
「ありがとう！」
思わず嬉しくなってそう言うと、青葉先生はにっこり笑った。
「手紙を渡したらね、彼が美樹ちゃんのことを色々聞いてくるんだ。守秘義務があるからってことでとりあえず入院してることと、キャンディ貰って喜んでたことだけ教えておいたけど……いいよね？」
「うん、それでいいです。」
「そしたら、慌てて書くものを探し始めたから僕がいつも使ってるやつを貸したんだ。味気なくてごめんね。」
「大丈夫。ちゃんと渡してくれてありがとう。」
製薬会社の名前が書かれたメモ用紙に、前の手紙より少しだけ乱れた翔さんの字があった。
『明後日、１３時頃うかがいます。』
ただ用件だけを書いただけの手紙だったけど、それでも喜ばずにはいられなかった。
翌日、私は看護師さんの手を借りてシャワーを浴び、髪を少し切り整えた。
「デートにでも行くみたい。」
理沙が笑った。
病室からほとんど出ることがなくなった私が身嗜みに気を遣うのは本当に久しぶりのことだ。
本当は服も普通の洋服にしたかったけど、理沙が
「入院してるんだから大人しくパジャマを着ていなさい。」
とうるさく言うものだから、やめてしまった。
確かに体調が悪くなったときに脱がしにくい服では困るので渋々それに従った。
その代わり、理沙はいつもよりかわいい部屋着を用意してくれた。
いつも着ている寝間着らしいものよりは洋服に近いデザインだ。

「さすが、頭いいね。」
「知ってる。」
翌朝、目が覚めた私は部屋着の上から薄いピンクのカーディガンを羽織った。
左腕にはいつも点滴用の針が入っているため、片腕しか通せない。
髪を整えようとして洗面台を覗き込む。
車椅子に座った青白い顔、少し荒れた髪、痩せた体。鏡に映った自分の姿はいかにも入院患者だった。
どんなに足掻いても結局、現実はありのままの姿でそこにいる。
それがどんなに残酷な姿であろうと。
翔さんと待ち合わせした時間が迫っていた。

約束

翔さんは時間通りに部屋に来た。フルーツの入ったゼリーを持って。
「お見舞いってどんなものがいいのかわからなくて……」
そう苦笑いする翔さんを私は少し浮かない顔で見つめる。気分が落ち込む理由は二つ。
「ゼリー、嫌いでしたか？」
心配そうに私の様子を伺うその顔を彼に重ねて、更に胸が締め付けられるように痛んだ。
鏡の中に見つけた自分。女の子らしいところは一欠けらも見当たらない。骨張った手、やつれた頬、窪んだ目。こんな姿、人に見せたいとは思えない。相手が好きな人に似た男性なら尚更。
そしてもう一つの理由。
「今日、香水違うんですね。」
「え？あぁ、そうかもしれません。いつも気分で日替わりにしてるんです。」
翔さんはくんくんと自分の匂いを嗅いだ。
香水の匂いがきついと言われたように感じたのかも知れない。
気にしないで下さい。前の匂いの方が好きだっただけなんです。
心の中でそう呟いて、もらったゼリーを食べ始めた。
「あれ……？」
喉をするんと通り抜けるゼリーの感触。
食べ物が一度も引っ掛からずに喉を通るのは久しぶりで、私は目を丸くした。
甘い果物の味。舌に感じるものを美味しいと思うのはいつぶりだっただろうか？
胃が握り締められたような吐き気もない。
「どうかしましたか？」
「これ、美味しい。」

翔さんは嬉しそうに目を細めた。
「よかった。いろんな種類を買ってきているので、いっぱい食べてくださいね。」
私は頷いた。だけど、不思議で仕方なかった。
お粥にしたり、重湯にしたり、すりおろしリンゴをしてもらったり、食べるための努力はした。
ゼリーだって試してみたことはある。
だけど、上手くいった試しはなかった。
横目でちらりと翔さんの顔を見る。にこにこ笑って私が食べる様子を見ていた。
「あの、あまり見られると食べにくいんですけど……。」
「え？あ、ごめんなさい！」
と、言いながら笑った翔さん。目を逸らす気はないようで、カッチリ目が合ってしまい、思わず笑った。
「ところで、何で敬語なんですか？翔さんの方が年上でしょう？」
私は言った。翔さんは前に会ったときも今もネクタイとジャケットを脱いだサラリーマンみたいなスタイルで、髪はすっきりと切り揃えている。
そんな格好も野暮ったさを感じさせない着慣れた雰囲気が、社会人としての時間の長さを思わせる。
「美樹ちゃんって、いくつ？」
「女の子に歳聞きますか……。二十代前半です。」
「あ、えっと、じゃあ、同じくらいかな？もうちょっと上だと思ってました。すみません。」
「正直に、いくつくらいだと？」
「三十代……。」
「帰れ！」
「ごめん、ごめんなさい！」
ポコポコと肩を叩くと、翔さんはわざと痛そうにしながら笑っていた。

私も笑った。周りに冗談を言い合って笑う相手がいなかったから、楽しかった。
「何か楽しそうだねぇ。」
少し開けたドアの隙間から青葉先生が覗き込んでいた。
「先生、こんにちは。」
「はい、こんにちは。」
翔さんと青葉先生が挨拶をする。ベッドのテーブルに食べ終わったゼリーの容器があるのを見て、青葉先生が言った。
「食べたの？」
「それ一つだけですけど食べましたよ。」
「何ともない？」
「はい。美味しかったです。」
青葉先生は不満そうに片眉を上げて首を傾げた。
「今日は重湯やめてお粥にしようか。美味しくないもんね。」
「そうですね……。」
私が頷いたのを確かめた後、翔さんに向き直り
「翔くんも調子良さそうじゃない。」
そう言った。
「はい。今日は問題ないです。」
「翔さんも青葉先生の患者さんなんですよね。」
「そうですよ。胃潰瘍になってからずっとお世話になってます。」
「胃潰瘍？」
「そう。ストレスでね、ついに血を吐くところまでいってしまって……」
「大変なんですねぇ。」
翔さんは苦笑しながら首を振った。
「心が弱いだけです。」
その言葉に青葉先生は顔をしかめて、翔さんを小突いた。
私が自嘲したときと同じ目で翔さんを見ているのが気になっていると、

「美樹さんは入院するほどどこが悪いんですか？元気そうなのに。」
翔さんは不意にそう切り出した。
「そうですね。体中あちこちですよ。ね、先生？」
「うん。体の中がね。」
「へぇ……入院は長いんですか？」
「いえ。入退院を繰り返していたので期間は長くないです。今回もまだ一ヶ月くらい。」
「そうなんですか。退院の予定は？」
退院。
当たり前のように口にされたその言葉は何だか耳障りな違和感のある言葉だった。
私は曖昧に首を傾げた。青葉先生は困ったように目を臥せた。
その夜から私の食事はお粥に戻り、量と食べるスピードに気を付ければ吐き戻さなくなった。
それでも体の調子は一向に好転せず、私はほとんど寝てばかりいた。
夢うつつに翔さんの言葉を思い出していた。
「退院の予定は？」
一生をこの病院のこのベッドで過ごすつもりでいた。
実際、今のように薬と点滴の管理をしてもらわなければ私の体はすぐに動かなくなるだろう。
家にいたときは痛みに呻き、目が回り、トイレに辿り着けず粗相をして理沙に片付けてもらったこともある。
あの時は本当に情けなく、申し訳なくて何度も理沙に謝った。理沙は気にせず笑っていたけれど。
頭はぼんやりするけれど、自由に動ける今の方がずっといい。
「ねぇ、青葉先生。」
「ん？おはよう、美樹ちゃん。どうかした？」
「先生は患者さんが亡くなったとき、何か声をかけたりする？」
「美樹ちゃん……」
「違うよ。ちょっとした興味だよ。ねぇ、何て言うの？」

「そうだな。お疲れ様、かな。僕の患者は美樹ちゃんみたいに長く闘病して亡くなる方が多いから。」
「じゃあ、辛い？」
「うーん。寂しい、かな。一緒に戦ってきた人だから。大変だったね、頑張ったね、お疲れ様って声をかけるよ。もちろん心の中でだけどね。」
青葉先生は唇をきゅっと結んだ。無神経な質問をしてしまったことはわかっていた。
「ごめんね。先生。」
「いや……どうしてそんなことを聞いたのか教えてくれるかい？」
私は少しの間、ベッドのシーツのシワを伸ばしたり、抜け落ちた髪の毛を集めたりして黙っていた。
青葉先生は急かすことなく静かに話し始めるのを待っていてくれた。
今まで入退院を繰り返してきた。
病気は完治しない。すぐに再発し、運び込まれてまた入院になる。
最初こそ、完治という言葉に期待もしていた。
健康とは言わない。ただ太陽の下を歩ける、走ることができる、痛みのない普通の身体。
だけど、いつの間にか薬を飲み、病院に通い、痛みに耐えることが当たり前になっている自分に気付いたとき、それは不可能なのだと悟った。
生きる時間を人並みまで延長できても、この生活は続いていくのだと。
だとしたら私が病気を克服してこの病院を出られるのは死んだときだけのような気がした。
そう言うと、青葉先生は何か言いたそうに口を開いた。私はその言葉が出る前に続けた。
「別に後ろ向きになってるわけじゃないよ。ただ、青葉先生にお願いがあるだけなの。」
「……何かな？」

「私が死んでこの病院を去るとき、『退院おめでとう』って言って欲しいの。」

青葉先生は唇をきゅっと結び、私の目を見て頷いた。

理由

翔さんは週に何度かお見舞いに来てくれた。
その度にお菓子を持ってくる。
水ようかん、プリン、スフレタイプのチーズケーキやチョコレートケーキ。
促されるままに私はそれを食べてしまう。
翔さんも一緒に食べるようになったので、見られ過ぎて恥ずかしいということはない。
ただ、吐かないという油断から食べ過ぎてしまうのが気になってしまう。
「こんなに食べたら太る……。」
と私が愚痴を零すと翔さんは笑って
「女の子はもっと丸い方がかわいいよ。」
と言ってケーキをもう一切れ差し出した。
文句言いたげに口を尖らせてそれを受け取り、口に入れる。
満足そうに頷いて私の頭を撫でる翔さんからは初めて会ったときと同じ香水が香っていた。
目を閉じて、彼に会いたいな、と思う。
私が初めて本気で好きになった人。顔や声、よく使ってる香水の匂いの他には名前と、住んでいる街しか知らない。
鏡の中に見た自分の姿が脳裏を過ぎる。こんな体では会いに行くことはできない。会いに来てなんて頼めない。
「どうしたの？」
目を開くと翔さんが首を傾げていた。
「ううん。何でもない。大丈夫。」
「泣きそうな顔してたよ。」
頬が引き攣るのがわかる。頭の中で何かが音を立てて弾けた。
枕を掴んで、開いた病室のドアに向かって投げる。

力なく飛んだ枕は床を滑り、廊下へ飛び出し、止まった。
「いきなりどうしたんですか……？」
翔さんは不思議そうな顔をして私の様子を伺う。私は黙って車椅子に乗り移り、ドアの前に移動する。
訳を聞くのを諦めたように首を振り、翔さんは私の方に歩いてきた。床に転がった枕を眺めている私の前を横切り、部屋を出て枕を拾い上げた翔さんの目の前で病室のドアは閉まった。
スライド式ドアのレール上に、立てかけてあったベッドの柵を挟み込むと、扉は動かなくなる。
翔さんがドアを開こうと力を込めるが、中を多少覗けるくらいの隙間しか開かない。
その視界に私はいない。
「美樹ちゃん？どうしたの？ねぇ！」
強く扉を叩く音。部屋の中にいる私に大声で叫ぶ翔さんを注意するため、看護師さんが飛んできた。
叱られた後、事情を説明する小さな声に耳を澄ませる。
看護師さんが走り去る音。翔さんはドアの前に座り込んで、小さく私の名を呼ぶ。
私は応えないのに、私に向かって声をかけ続ける。
「美樹ちゃん。どうしたの？何でこんなことするの？教えてよ。話してよ。」
あなたこそどうして？ただ偶然、目が合っただけの私にどうして優しいの？何で腹を立てて帰らないの？
追い出したのは自分なのに、私は今すぐドアを開けて翔さんの顔を見たいと思っていた。
何だか矛盾しているものが胸の中にひしめく。
傷付けたい。でも謝りたい。
傍にいてほしい。だけど、近付かないでほしい。
「美樹ちゃん。そこにいるなら、聞こえてる？話してもいいかな。」
翔さんが言った。私は頷いた。

「僕は中学を卒業してすぐに働き始めた。学歴より専門の知識が必要な仕事で、元々好きな分野だったこともあって、仕事はすぐに覚えられた。」
やや早い足音が近付いてくる。
「だけど、若いうちに成功すると妬まれ、敵視されることが多い。それまであまり人と接して来なかったせいで僕は人からの好意や悪意に鈍く、上手く対処できずに……人が怖いと感じるようになった。」
足音が私の病室の前で止まった。
「仕事は一人じゃできない。人が怖くても、人と一緒にやらなければ。段々と頭痛に悩まされるようになった。過呼吸や、目眩で倒れることも増えた。僕を敵視する人たちはそれを利用して僕から仕事を、生きがいを奪っていった。」
足音の主の一人はさっきの看護師さん。もう一人は誰だろう。
「美樹ちゃんと出会った日、実は僕は職場から逃げ出してきたんだ。誰も僕を見ようとしない。声をかけてももらえない。僕が必要な仕事はない。この世界のどこにも僕は必要とされていないんじゃないかと思った。」
私は高校のときのことを思い出した。病院で検査入院をして久しぶりに学校に顔を出すと、今まで友達だと思っていた人たちが知らない人のように思えた。
「あの日、青葉先生に会うつもりで来たんだけど、やっぱり帰ろうと思った。顔を上げたら君がいた。美樹ちゃんは僕の知らない世界が写った写真をくれた。僕がまだいたことのない世界には希望があるって教えてくれた。」
ドアが揺れた。開かないとわかると、また元に戻った。
「来ないで。」
私がやっと言えた言葉はそれだけだった。
近付いて来ないで。私が見ていたのは、探していたのはあなたじゃない。それがわかったら傷付けてしまう。

「美樹ちゃん。開けなさい。」
そう言ったのは青葉先生だった。
「せっかく出来た友達だろう？人と深く付き合うのを恐れた君がやっと仲良くなれた友達なのに、簡単に捨てていいのかい？開けなさい。」
「でも……でも、私はもうすぐ死ぬんです。しかもそう遠くないうちに。本当は死にたくないんです！でも死ぬんです。」
今まで目隠ししていたものをとうとう認めてしまった。眠りにつくたびに抱く死への恐怖、訪れるかどうかもわからない未来。急に涙が溢れてきて、私は慌てて指でそれを拭った。
早い鼓動が胸に響く。息が苦しい。だけど、溢れ出してしまった感情は止まらなかった。
「死ぬのは嫌だ。学校も行かなかった。恋愛だってしたことない。好きな人に好きだって言えなかった。好きな人と結婚して、死ぬまでずっと一緒にいたかった。だけどもう死ぬのに、傍になんかいられないのに言える訳ない。」
「死ぬ人にだって友達はいる。生きる間は傍にいて死んだら悲しんでくれる人が必要なんだよ。君がどんな状態だったとしても。」
「誰の中にもあの人の代わりを探してしまう。そうなれば悲しませるだけなのに、苦しませるのに。一緒にいてほしいなんて言えない！」
スライドドアの隙間から細い板が差し込まれて、レールの上に挟まっていた柵が倒れた。
私は車椅子の上でもう何も見えない目を閉じた。息を吸うことを拒むように喉が詰まった。
鼓動が一番大きく聞こえる耳に、青葉先生の声と翔さんの声を聞いた。
手が痛いほど強く握られた感触と温もりだけが痛みより、苦しみよりもっと近いところで感じられた。

夢

夢現に病室の中の様子を何度か感じることができた。理沙の声が聞こえていた。翔さんと話しているようだった。

「僕が気をつけてなければいけませんでした。そんなに悪いとは知らなくて……」

「いえ、いいんです。姉が言わなかったんでしょう？わかってますから頭を上げて下さい。」

「でも、まさかこんなことになるなんて……」

「姉のことなら大丈夫です。帰って休んで下さい。目を覚ましたときにそんな格好では姉が気にしますから。」

「はい……すみません……」

ドアが閉まる音。パイプ椅子が軋む音。理沙が私の耳元で囁くように言った。

「いい人だね。お姉ちゃん。」

でも今の情けない声を聞いていたら、ちょっと頼りない気がする。こういうとき、理沙を励ますくらい頼もしい人がいいのにな。

「大丈夫だよね。また目を覚ますでしょう？」

本当は今すぐにでも目を覚ましたかった。だけど身体は鉛を詰めたように重く、瞼は開き方を忘れてしまったかのようだ。

理沙が小さく溜息をついて私の手を握った。

「また目を覚ましてくれるなら今じゃなくてもいいよ。ゆっくり眠ってね。」

理沙の言葉は祈りを唱えるみたいに静かで力強かった。

私は眠りの底へ再び身を沈めながら、両親の姿を頭に描いた。

あの二人を最後に見たのはいつのことだったかな。私のことは心配してなくていいから、せめて理沙の傍にいて支えてあげてほしい。

たった一人で人には言えない不安と闘い、強がっているのは苦しいだろうから。

「美樹ちゃん。」
大好きな彼の声がする。夢でいいから会いたい。もう一度、顔を見て、あの温かい手で髪に触れてほしい。
そう思っていると、頬に温かいものが触れた。
さっきまではガラスの向こうから響いてくるような音や、何枚も服を重ねた上から触れられているような感触だったのに今はそれよりもずっと近い。
身体の表面に薄い膜を張ったみたい。
「あれから考えたんだ。僕が君のためにできることは何があるのか。」
何もしてくれなくていいよ。あなたはもう十分過ぎるほど私の世界を変えてくれた。
痛みと苦しみの中で生きていた私にほんの一時だけど幸せをくれた。
「僕が代わりになるよ。君が望む相手になれるように努力する。」
代わり？何のこと？
ゆっくりと瞼を上げると理沙の顔が一番に目に入ってきた。
「僕が君の夢になる。美樹ちゃんを守るよ。だからずっと傍にいさせて下さい。」
理沙が僅かに微笑みかけ、目を動かすと真面目な顔をした翔さんがいた。
「何……翔さ……か……」
掠れた声で私が言うと、理沙が小さな涙声で笑った。翔さんは苦笑いしながら言った。
「そんながっかりした顔しないで下さい。」
「ね、生死の境を彷徨ったとは思えないでしょう？」
理沙が安堵の涙を流しながらおもしろがるように言った。翔さんは私の髪を撫でながら頷いた。
その後、青葉先生が来て私は泣き言にも似たお説教を聞かされることとなった。
話し続ける間、平静を装う青葉先生を見て、誰もが顔を見合わせて

声を殺して笑った。
私が倒れてからほとんど寝ていないらしい。寝不足が見てとれるほどひどい顔をしている。
泊り込みの日々を表すシワだらけのシャツの色とネクタイの色がちぐはぐだ。
「何だよ。笑うなよ。」
充血した目を見続けることにとうとう堪えられなくなった私に青葉先生が言った。
私が手を合わせて謝ると、青葉先生は口を尖らせて
「まぁ、いいけど。」
とそっぽを向いた。看護師さんはその仕草を見て限界だと言うように部屋を出て行った。
青葉先生も部屋を出て行くと、翔さんがベッドの横に座った。理沙はベッドを挟んだ反対側にいる。
「さて、我が眠り姫のご要望は？」
「え？」
「僕をどうする？傍に置いてくれる？」
私が返事に詰まっていると理沙が口を挟んだ。
「それは……付き合うってこと？」
「それは無理だよ！他の人のことを彼のようには好きになれないもの。」
私が即答してしまうと翔さんは少し肩を落とした。でもすぐに気を取り直して
「わかった。恋人にはなれなくても、してみたかったことを叶えるくらいはできますよ。」
明るくそう言った。
今まで彼氏などいたことがなかった私にとって、それはありがたい申し出だった。確かに相手がいればやってみたいと思うことはたくさんある。
だけど、外出できない制限付きの身となった今では相手がいても出

来ないことの方が多いことに気付いた。
映画を見に行って、一緒に夕飯を食べて、彼氏の家に外泊だとか。
遊園地に行ってお化け屋敷や観覧車を満喫するなんてことは到底無理な話だ。
そんな叶わない夢ばかりを語っていると翔さんは真面目な顔をして
「しばらく考える」と言って帰った。その後姿を見送って
「いい人だよね。」
と理沙が言った。
「そう？ちょっと頼りない気がするけど。」
「お姉ちゃんが寝てるとき、青葉先生から『話がある』って呼ばれたの。『もう助からない』って言われるのが怖くて行くのを拒んでいたら翔さんが言ったの。」
「何て？」
「先生が何を言っても、お姉さんは頑張りますから大丈夫ですよ、だって。」
理沙がそう言ってちょっと頬を紅く染めた。
翔さんがいつものわかってるんだか、わかってないだか読めない調子でそう言う。理沙は素直じゃない態度で返事をする。
「言われなくても知ってます。お姉ちゃんのことを一番わかってるのは私ですから。」
少しムキになってそんなことを言い、ぷいと部屋を出る理沙の後姿を見ながら困ったように笑う翔さん。
その様子を想像して思わず微笑んだ。理沙が呟く。
「あの人にならお姉ちゃんを任せてもいいな。」
「理沙もそういう人を連れてきてよ。」
二人で顔を見合わせ、小さな声で笑い合った。

取り戻した夢

数日後、私の部屋には大きな液晶モニターと分厚い黒いカーテンが持ち込まれた。
ベッドから起き上がれない私からでもよく見える位置にモニターが置かれ、窓を全て覆い尽くせるように黒いカーテンが取り付けられる。
病院では見かけない作業服姿の男性三人が黙々と仕事を進めていくのをぼんやりと見ていたら翔さんが来た。
「おはよう。あ、作業進んでるね。」
「……これは何？」
「美樹ちゃんの願いを叶えるための準備だよ。」
にっこりと満足そうな笑みを浮かべて翔さんは説明した。
青葉先生と相談したところ、やはり外出は許可できないと言われたらしい。
そこで翔さんは病院の中で出来ることを最大限利用することにしたと言った。
「準備にはもう少しかかるだろうから、仕事が終わったらまた来るね。美樹ちゃんは気にせず寝てていいよ。」
私は戸惑いながら頷き、翔さんを見送った。
気にせず、と言われてもすぐ傍で知らない人が見慣れない作業をしていると気になってしまう。
それでも時々は目を閉じてまどろみに身を預けることもできた。
疑問はたくさんある。だけどそれ以上に何が始まるのか期待に胸を膨らませているのもあって、翔さんが来てくれるのが待ち遠しかった。
夕方、空が少し暗くなりかけた頃に翔さんが来た。
手にビニール袋を持っている。中から取り出したのは数枚のＤＶＤだった。

「好みを聞くの忘れてたから色々借りてきたよ。」
それは映画のＤＶＤで、ジャンルは恋愛からファンタジー、アニメなど様々。
「ホラーは僕が苦手だから借りてないんだけど、いいよね？」
苦笑いしながら言う。私は大きく頷いた。
映画はどれも話題作で人気らしいが、今まで自分が興味を持って知ろうとしなかったことが悔やまれるほど知らない作品ばかりだった。
翔さんがあらすじを説明してくれる。
あまりに楽しそうな顔で説明するのでどれも面白そうに思えてきた。
私が迷っていると
「今日だけじゃなくて、また見られるから大丈夫。」
そう言って笑った。
とりあえず選んだのはファンタジー。魔法や妖精などの人間ではないものがたくさん出てくる。
翔さんがＤＶＤをセットしていると理沙が紙袋を持って現れた。
中にはジュースとポップコーンが入っていた。香ばしい匂いが部屋に充満する。
「お店の人と話するのに手間取っちゃった。間に合った？」
「大丈夫。ありがとう。」
茶色い紙袋の中から出てきた映画館のロゴがついたジュースをテーブルに、ポップコーンは私の膝の上に置かれた。まだ温かい。
どうやら理沙も協力しているらしいところを見ると知らなかったのは私だけのようだ。
「理沙も一緒に見て行く？これ面白そうだよ。」
帰ろうとする理沙を呼び止めると、二人は目配せをして首を傾げた。
「邪魔にならない？」
「僕は構わないよ。」
「そう？じゃあ……」
短いやりとりが終わると理沙はいそいそと荷物を置いて、体を起こした私の横に座った。

私を挟んで反対側に翔さんが座り、リモコンを使ってＤＶＤを再生する。
薄味のポップコーンを女二人でつまみ食いしながら初めて見る映画に胸をときめかせた。
理沙は遊び盛りの時期を私の介護に費やしてしまったせいで、映画なんて見に行く暇がなかったに違いない。
タイトルは聞いたことがあっても実際に見たのは初めてだったようで、楽しそうだった。
翔さんは時々こちらの様子を見て満足そうな顔をしていた。
ベッドは三人が並んで乗るには狭く、かなり密着していたせいか、映画の内容のせいかはわからないが始終ドキドキしたままだった。
エンドロールが終わると、私は翔さんの腕を捕まえて甘えるように顔を摺り寄せた。
翔さんの大きな手が私の髪を撫でる。
「彼氏と映画、楽しんで貰えましたか？」
「え？」
「本当は映画館で楽しんでもらうつもりだったんだけど、妥協案として大画面で映画を楽しんでもらうことにしたんだよ。」
あれは冗談のつもりで言ったことだったのに、翔さんは真面目に私の言葉を聞いて考えてくれていたようだ。
心の片隅で叶えたいという気持ちはあった。
だけど、所詮夢は夢であり、自分はもう死ぬばかりで望み通りの未来などないと諦めてしまっていた。
努力してもどうにもならないことがあるんだと思うしかなかった。
でも、勝手にそう思い込んでいただけなのかもしれない。見方を変えれば世界は色を変え、姿を変える。
私が知らないことの数だけ方法はあるのかもしれない。もしかすると、無限に。
「それを僕に教えてくれたのは、君だよ。」
翔さんが言った。

「君の夢は僕が叶える。だから、諦めたりしないで。何でも言って欲しいんだ。」

迷う気持ち

それからというもの、翔さんは私が言ったわがまま放題の希望を叶えるために手を尽くしてくれた。
遊園地に行きたいと言えば、シュミレーションゲームを持ってきて私にコントローラを握らせる。
やたらリアルなジェットコースターや、観覧車の動きと景色は、幼い頃に行った遊園地を思い出させた。
まだ一人では食べきれないのにソフトクリームをねだって、容赦なく溶けていくソフトクリームを必死になって食べていた。
そんな話をした翌日、翔さんはどこからかソフトクリームを買ってきた。
「一緒に食べよう。」
そう言って差し出されたソフトクリームは甘くて、心にしみるような優しい味だった。
青葉先生は翔さんに私が興奮したり、生活のリズムを崩すようなことはなるべくさせないようにとうるさいくらい念をおしていた。
お化け屋敷の代わりに翔さんが用意してくれていたホラーゲームは結局ダメになったし、私が今まで口にしたことがないアルコール類も絶対に許可してもらえなかった。
けれど、結局のところ協力してくれていた。
病室に運び入れた大きな画面や、部屋の中で少しうるさく騒いでしまうことについては大目に見るようにしてくれたし、翔さんが準備をしているときは食事と薬の時間を少しだけずらしたりしてくれていた。
だから、翔さんが来る日に検査で部屋にいないということはなかったし、体調が悪くて面会ができないということは少なかった。
はしゃいだ翌日、目が覚めない私の横に翔さんが寝ているのを感じた。

目を開けなくてもわかる、香水の匂い。
温かい胸板に頬を押し付けると、優しく髪を撫でてくれる。
安心してまた眠りに落ちていく。
「まるで恋人同士みたいだね。」
青葉先生がからかうように言った。
「僕は眠り姫を守る騎士です。王子にはなれませんよ。」
翔さんは悲しげにそう呟いた。
そのため息にも似た呟きを聞いて胸が痛んだ。本当は翔さんを好きになれると思う。これだけ私のことを大切にしてくれて、わがままを言っても傍にいてくれる。
でも好きな人の姿を彼に重ねてしまううちは、翔さんを好きだと言える自信はない。
「忘れられない人がいても、自分が二番目でも自分を選んでくれれば彼は構わないんじゃないかなぁ。」
青葉先生が言った。
それでも結局、自分が翔さんを好きだと言う自信が持てない。好きな人に似ている翔さんが好きなのか、翔さん自身を好きなのか自分でもよくわからないのだ。
その答えを探せるだけの時間は、もう残っていない。
「病気でもうすぐ死ぬんだし、今のままでもいいと思うの。」
「お姉ちゃんはさ、病気だってことを言い訳にしてない？」
理沙が言った。
「やめてよね。何でそうやってすぐ病気のせいにして甘えるの？努力に全力を尽くさないのに出来るはずないよ。それで出来ないなんて言うのは本当に出来ない人に失礼だよ。」
理沙の顔。充血した目の下はクマで青い。自分の成績が落ちたり、留年すれば私の看病をしているからだと言われて姉の評判を落としてしまう。両親からの風当たりも強くなる。
だから遊びも恋も捨てて、だけどそれを悟られないように流行の服や髪型に涼しい顔をして完璧を装ってきた理沙。

私が何より欲しいと願う健康な体。優しい性格とかわいい顔。それなのに何一つ努力を欠くことの出来ない不自由な生活。
にも関わらず原因である私に怒ったり、看病を投げ出したりしたことはない。
「出来ないと思ってるから出来ないの。自分がこれで完成だと言えば、周りはそれを認めるよ。」
「そんなものかな。」
「だって認めるしかなくなるよ。誰も正解の形を知らないんだもの。誰かが何か言って来たって、『それはあなたの正解でしょ。私の正解じゃないの』って言っちゃえばいいんだよ。」
「そんな無茶な。」
私は笑った。理沙も無理矢理吊り上げた眉を下ろして微笑んだ。
「理沙はすごいね。」
「うん。知ってる。」
たった一人の自慢の妹は少し照れ臭そうにそう言った。

心の距離

食事中。と言っても私は病院食、翔さんはコンビニのお弁当だけど。
私は翔さんの顔をじっと見ていた。
臥せた目元に落ちた睫毛の影、ソースで少し汚れた唇、痩せた頬。
大きくはないけど筋張った手、今日も香水のいい匂い。
今日は家に呼んで食事。本当は自分で作ったご飯を食べてもらうのが夢だったんだけど、私にはキッチンがないし、調理する間ベッドを離れることには不安があるとのことで残念ながら却下。
理沙もあまり料理が得意じゃないし、仕方ないので翔さんにお弁当を買ってきてもらって一緒に食べるということになった。
いつもの病院食。だけど、お粥と飲み物は翔さんが選んで買ってきてくれた。
中華風のお粥と、ハーブティー。
「人の家に食事に呼ばれたら手土産は基本だから」
そう言って用意されたハーブティーを看護師さんに淹れてもらい、お粥を器に移して食べ始めた。
熱々のお粥はそれだけ食べても美味しくて、勿体ないくらいのスピードで食べ終わってしまった。
ハーブティーもほんのり甘い香りと酸味で、消化を促し、体を温めてくれた。
先に食べ終わった私は翔さんの食事風景をただじっと観察していた。
時々、顔を上げて首を傾げる仕草に首を横に振って応える。
やっぱり翔さんに彼氏になってもらうつもりはない。それが私の答えだった。
それでも気になって何となく聞いてみた。
「ねぇ、もし私が翔さんのこと好きで付き合おうって言ったらどうする？」
「え？どうしたの？いきなりだね。」

翔さんはそう言って黙りこんでしまった。冷めかけのハーブティーを飲みながら難しい顔をして考えているようだ。
そんなに悩むなら答えなくてもいい、と言おうとしたとき、翔さんは言った。
「嬉しいけど、自信がないな。」
「自信？」
「僕は弱い男だ。一人の女の子に相応しい人間じゃない。君の彼氏だと名乗れる自信がないよ。」
「私、そんな大した人間じゃないよ。」
「いや…。僕は今のままで構わないんだ。美樹ちゃんはそれじゃ嫌かな？」
深い悲しみに満ちた声を聞いて頷くことはできなかった。
私が首を振ると翔さんは「ありがとう」と微笑んだ。
冷めたハーブティーがさっきよりも苦くて、胸の苦しさが更に締め付けられるように増した。
優し過ぎるくらい温かい素敵なこの人の心をこんなにも蝕む何かがあるのだと言うことが信じられなかった。何よりもこんなに近くにいながらまだ自分の知らない、踏み込むことのできない領域があるのだと気付かなかったことが辛かった。
私がしょんぼりと俯いていると、翔さんが困った顔で覗き込んでくる。
その顔に今までは大好きな彼の顔が重なっていた。だけど今日は他の誰の顔も浮かばない。初めて翔さんの顔をちゃんと見た気がした。
涙が溢れ出る。
それは申し訳なさであり、愛しさでもあり、同時に彼をずっと好きでい続けたいと願っていた自分を裏切ったことへの悲しみでもあった。
彼に会いたい。もう一度会って、縋るように繋いでいるこの気持ちが本物なのか確かめたい。
私が黙ったまま泣き続けるので、翔さんは少し狼狽えてから起き上

がっていたベッドを平らに戻し、私の体をゆっくりと横たえた。
「疲れただろう？ごめんな。少し休んでいいよ。」
そう言って涙の跡を拭うといつものように髪を撫でてくれる。私は安心して目を閉じる。
この頃、私の体は長い時間起き上がることができずにいた。眠る周期も長く、目が覚めるのは二日か、三日に一度くらい。
このまま眠ったら二度と目が覚めないのではないかと怯えて、眠る度に悪夢にうなされていた。浅い眠りとストレスにより体調が悪化していた私の傍に翔さんは当然のように寄り添い、眠った。
その静かな寝息と温もりを感じているうちに私は恐怖を忘れ、眠りに落ちていく。
そしていつしかこうやって眠ることが当たり前になっていった。
「おやすみ。」
翔さんが呟いた。私はそれを意識の彼方で聞く。目覚めたときは既に記憶にないその声はいつも初めてのようで懐かしい。
そうして削られていく命を繋ぎ留めるため、私は眠った。

最後の願い

理沙の手が痛いくらいの強さで寝ている私の手を握る。その痛みで目を覚ます。
脳が身体の動かし方を忘れてしまったかのようだ。身体中が重くて怠い。声も出ない。目だけが動く。
理沙が私の目を見て何か言っている。しかし声は音でしかなく、その言葉が耳に届かない。
段々とかつての感覚が蘇ってくると、握られた手を僅かに握り返した。
「お姉ちゃん、私の言ってることわかる？」
理沙は一言一言を確かめるようにゆっくりと話した。私は返事の代わりに息苦しい呼吸を大きく一回する。それに合わせて瞼を動かすのを見て理沙が安堵の表情を浮かべた。
手に入っていた力が緩み、二人の手が離れる。
ナースコールで看護師と青葉先生がやってきた。
目にライトを当てられ、眩しさに顔を顰める。文句を言うつもりで開いた口からは声にならない何かが中途半端に漏れた。
「美樹ちゃん。君は呼吸が止まって、一時は心臓も止まっていたんだ。今日で一週間だよ。よく頑張ったね。」
私にとっては一晩程度の感覚だった。一週間、生死の境を彷徨ったなんて信じられない。
夢も見ずに眠っていた。本当は見ていたとしても、記憶にはない。
「麻痺や障害はないようだから一先ず乗り越えたと思っていい。」
青葉先生が言った。理沙は頷いてお礼を言った。
「でも、これからは同じことが繰り返し起こる。何度持ち堪えるかは美樹ちゃんの気力と体力次第だよ。」
理沙に向けて言っているのかと思ったら、違ったようだ。青葉先生は私の目を覗き込んで少し微笑んだ。

僅かに頷いてみせる。頭痛で顔を歪めると看護師さんが枕を調節してくれた。
「しばらくは安静に。慣れてきたら動ける範囲で起き上がっていいよ。無理は禁物。いいかい？」
私は頷く。さっきより頭痛は軽い。看護師さんの視線を捉えて笑ってみせると、看護師さんは小さくピースサインで応えた。
理沙から連絡を受けたらしい翔さんは仕事が終わってすぐに駆け付けた。
その頃には声の出し方もわかってきて、少し掠れた声と動き始めた手を使い僅かな単語で簡単な話を出来るようになっていた。
病室のドアを開けた翔さんは青白くやつれた顔で、初めて会った人のように思えた。
私が挨拶代りに手を振ると、翔さんはため息をついた。
「おかえり、美樹ちゃん。」
そう言って私の髪に触れた手は震えていた。
「ずっと考えていたことがあるんだ。でも、多分、許可が出ないと思ったから言わなかった。」
「許可って、青葉先生の？」
「うん。だから、許可が出てから言おうと思っていたんだけど……また外に出たくないか？」
突然の質問に喉が詰まった。窓越しに広がる景色と青い空。
病院の生暖かい空気の中で見るそれはすっかり色をなくして、今では外の空気の匂いすら忘れてしまった。
瞼の裏に焼き付けたはずの景色も朧げにしか思い出せなくなっている。
「また行きたくないか？美樹ちゃんの好きな人のところへ。」
その言葉を聞いた瞬間、かつてないほど鮮明に彼の顔が頭に浮かんだ。
彼が住む街の気配、彼が私を見つめる目、安心する温もりの手。再びあの場所に行けるなら、他に望むものは何もない。

「行きたい。でも会いたくない……」
「どうして？美樹ちゃんが望むなら僕が叶える。青葉先生だって協力してくれるはずだ。何も心配しなくていいんだ。」
私は力無く首を横に振った。
「そうじゃないの。彼は病気のことを知らない。今の私を見せたくないの。」
私が鏡の中に見た自分。痩せ細って目の回りは黒ずんで窪み、点滴と注射の針を刺した腕は痣のような痕がいくつも残る。
髪や肌は荒れてボロボロになり、乾いた唇の隙間から見える歯もあまり綺麗とは言えない。
歩くことも、立つことさえも出来ない体は細く、まるで幽霊のような気味の悪さを醸し出している。
「彼に会わなくてもいいさ。同じ街に行くってだけでも楽しいだろう？」
「ううん。いいの。もし、彼に会ってしまったらと思ったら楽しめないし、これでいいの。」
翔さんはそれ以上、何も言わなかった。理沙と視線を交わして僅かに眉を寄せ、病室を出て行った。
「本当にいいの？」
理沙が聞く。私は頷く。
行きたい場所がないわけではない。でも彼の住む街は遠く、私が思い描く場所がどこなのか、説明できない。思い出を確かめるためだけにわがままを重ねたくなかった。
私の知らないところで二人は何度も打ち合わせを重ねてきたのだろう。
理沙が寂しそうに俯く姿が胸に痛い。
慌ただしい足音と共に青葉先生、続けて翔さんが戻ってきた。
「外に出たいと言ったのかい？」
「いえ、先生。もしもの話です。美樹ちゃんは何も……」
「病院の周りならともかく、そんな遠くには行かせられないよ。も

し外出先で何かあったらどうするんだ？」
青葉先生の声は震えていた。なのにその声は有無を言わさぬ力があった。
「病院の周りなら構わないんですね。」
「どうしてもというなら…たった一度だけチャンスを作ろう。ただし数時間で帰って来ることが出来る距離だ。走ったり、歩いたりせず車椅子に乗ったまま。人混みに行くことも許可できない。それでいいかい？」
「多分……。ねぇ、この辺りで海が見えるところってあるかな？」
そう聞くと翔さんが不思議そうな顔をして首を傾げた。
「高台に行けば遠くに海が見える場所はあると思うけど……海が見たいなら……」
「ううん。海が見える場所で桜の木がある場所を探してほしいの。」
翔さんと理沙が顔を見合わせた。難題を与えられて困っているんだろう。
「わかった。準備しよう。」
意外にもそう言ったのは青葉先生だった。
「でも、今のまま外には出せない。体調を完璧に整えて、気候がよく、身体に負担がかかりにくい日まで待たなければ。それまでに一度でも急変すれば計画は中止だ。いいね？」
「はい。」
青葉先生の大きくてたくましい手が私の手を握る。私はずっとこの手に導かれてここまで生きてきたのだ。
先生が私の願いを叶えてくれるのだとその手が言っていた。

あの場所

外出が決まってから数日間のことは、奇跡としか言いようがない。
私の体調は信じられないくらい好転していた。
再検査をして結果を見直し、悪化の兆候を見逃すことがないように治療方針の見直しも行った。
天気がよく、穏やかな気候の日々が続き、出かけるには最高のコンディションだった。
外出日を明日に控え、青葉先生が入念に診察をする。
「あんまりはしゃいで明日動けなくなっても知らないよ。」
「大丈夫ですよ。」
「どこに行くのか聞いたかい？」
「いえ、希望通りの場所が見つかったとしか教えてくれませんでした。」
「そうか。」
「今の時期ではまだ桜は咲きませんよね？残念だなぁ。」
「さぁ？翔くんが桜の木に頼んで一輪くらい咲かせて貰ってるかもしれないよ。」
「そんな、魔法使いじゃないんだから。」
私は笑った。青葉先生も今まで見たこともないくらい優しい顔で笑った。
「さて、僕に出来る仕事はこれで終わりだ。明日は楽しんでおいで。」
立ち上がり、部屋を出る青葉先生に向かって私は言った。
「先生、ありがとう。」
先生は背を向けたままひらひらと手を振り、ドアを閉めた。
その日は一人だったけれど、頭の中に明日行く場所の景色を思い描いているうちに眠ることが出来た。
眼下に広がる空より濃い青色の海と頭上に広がる淡い桜色の花。彼

の住む街で見た場所。だけど、見ることのできなかった景色。
理沙の呼ぶ声で夢から覚めると、彼の匂いが頭の中を満たした。
翔さんが車椅子を準備して理沙の後ろに立っていた。
朝食を終わらせて着替えを済ませ、車椅子に乗り込む。
久しぶりに人の行き交う受付前を通り、外へと繋がるドアへ向かう。
自動ドアが開くとひんやりとした空気が建物の中に吸い込まれ、病院内に満ちる暖房の熱で麻痺していた肌が感覚を取り戻す。
肺いっぱいに吸い込んだ空気の味はどこか懐かしさを感じさせるのに、何故かよそよそしくもあった。
移動はタクシーだった。車椅子ごと乗れる大きな車で、ゆっくり降りてきたステップに車椅子ごと乗ると、ベルトで車椅子を固定され、ゆっくりと車の中に運ばれる。
フォークリフトで運ばれる貨物になった気分だ。
それから理沙と翔さんが乗り込み、車が発進した。
車に揺られるのも久しぶりで、周りの景色が過ぎては遠ざかるのを食い入るように眺めていたら、理沙が
「初めて車に乗った人みたい。」
そう言って笑った。
山道を少し走ると、景色は木とガードレールばかりになった。
その先に並ぶ民家の隙間を縫うように作られた道路をしばらく走り、車は止まった。
「ここからは目を閉じて。」
翔さんが言った。私は従った。
車を停めた辺りは道が狭いので、もし移動しなければならなかったときのことを考えて、理沙は残ると言った。
翔さんに押され、車椅子はでこぼこ道をゆっくりと進んで行く。静かな場所に、タイヤの音と足音が響く。
道の音が僅かに変わった。
「目を開けていいよ。」
合図で目を開く。眩しい太陽の光に目を細める。

目の前に広がる景色に私は息をのんだ。
何もない空き地に一本の木が立っている。その木は信じられないほど美しく薄紅の花を咲かせていた。
「桜が、咲いてる。」
私は思わず呟いた。翔さんが黙ったまま車椅子を更に押し進める。
桜の気高い香りが鼻をくすぐるほど近くに寄ると、斜面の下に広がる街があり、その先に太陽の光を反射して金色に輝く海が見渡せる。
「綺麗……信じられない。翔さんは私の心が読めるの？魔法使いみたい。」
「魔法のタネが知りたい？」
私は迷わず頷いた。翔さんは教えたことを誰にも言わないと約束させてから話し始めた。
ここは元々、青葉先生が昔受け持った患者さんの土地だったそうだ。
野菜や花がいっぱいの自慢の畑だった。
入院中はずっと畑のことを心配していたらしい。世話をする人がいないから、花や野菜が枯れてしまう。だから早く元気になりたいと言っていた。
でも、治療のかいなくその人は亡くなった。
患者さんの子供たちはその人が大切にしていた土地を更地にして売ると言った。
青葉先生は　患者さんがあんなに気にしていた畑を更地になってしまう前に一目見てみたくてここへ来た。
そこには枯れかけた花と野菜、そしてその真ん中に畑を守るように佇む桜の木があった。
桜の木の下に、まだ元気に動き回る患者さんの姿が見えた青葉先生は患者さんの家族を説得し、桜の木とこの土地を買うことにした。
今でも時々、小さな花や野菜の苗を植えて育てているらしい。
「この桜は寒桜。普通の桜よりも少し早く咲くんだ。」
翔さんが言った。木から一輪摘み取り、私の手の平にのせてくれる。
小さな花は柔らかいエネルギーに満ちていた。生きているものの力

を感じる。
「人の繋がりって不思議ね。その人が大切にしていた気持ちを青葉先生が継いで、今は私の願いを叶えてくれた。」
きっともっと前から繋がり続けた思いがあるのだろう。今は形がなくとも、その思いが繋がる限り全ての人は生き続けている。
この桜の木はその思いの全てを見てきたのだろうか？
私は何を繋げられるのか。翔さんに、理沙に何を残せただろう。
両親にも、青葉先生にも、もしかしたら好きな人にも、繋がる何かを残せたかもしれない。
だけど、それは私には確かめられないことだ。その先を繋げるのは他の人の役目で、私の預かり知らぬ場所と人の間に繋がるものだから。
「私が生きていたこと、忘れないでね。」
「忘れないよ。忘れられるはずない。」
「そっか。ありがとう。」
桜の木が風に吹かれてさらさらと音を奏でた。
「冷えるよ。戻ろう。」
翔さんに車椅子を押されて、その場を後にした。
病院に帰る車の中は誰も口を開かず静かな時間が流れていた。ガラス越しに聞こえる対向車の音がやけに大きく聞こえる。
そういえば、こんな静寂も久しぶりだと思う。
病院ではいつも機械の音に、他の部屋にいる患者さんたちの声や看護師さんの足音がする。
慣れて気にならなくなってしまったものが、離れてみると懐かしくて愛おしい。
「ねぇ、理沙。」
「ん？」
「お母さんとお父さん、元気？」
「元気だよ。どうしたの、いきなり。」
「ううん。会ってないから懐かしいなって思っただけ。」

理沙は不思議そうな顔をして首を傾げた。
病院に帰ってきて、部屋に戻ると何だかホッとした。あるべき場所に戻ってきた気がする。
「先生に帰ってきたって言ってくるね。」
「僕も行くよ。報告したいこともあるし。」
二人はそう言って慌しく出て行った。
部屋に一人残された私は、テーブルの上に置いたコップの水に花を浮かべて眺めた。

最期の眠り

その夜、青葉先生の診察を受けて消灯時間を迎えた美樹は再び昏睡状態に陥った。
家に帰っていた理沙は連絡を受けてすぐに駆けつけ、理沙から知らせを受けた翔もすぐにやってきた。
二人の頭は昼間、青葉先生に言われたことを繰り返し思い出していた。
「命が尽きる前、ほんの僅かな間だけ病状が回復して元気になることがある。今はもしかしたらその時かも知れない。だとすれば近いうちに……覚悟しておいてほしい。」
信じたくはなかったが、心のどこかでこの日が最後だと予感していた。美樹の様子がいつになく落ち着いて、穏やかに見えたから。
「両親は？」
沈黙に耐え切れずそう切り出した翔に理沙は首を振った。
「お父さんは『もういい』って。お母さんは『会っても仕方ない』って。二人とも、お姉ちゃんがもう死んだみたいな言い方するの。」
両親にもう一度会わせる。これが二人が美樹のために準備していた最大の難問だった。
美樹の自殺未遂騒動があってから、両親は美樹を諦めたように手放した。自分たちに娘は一人しかいないのだと言うように理沙を特別に扱い、美樹の誕生日すら祝うことはなかった。
入院してからも病室に顔を見せず、着替えの一枚も持って来ることはない。
最後にもう一度、家族揃って食事をすること。それは美樹が口に出来なかった望みであることは皆知っていたし、理沙の願いでもあった。
理沙は静かに眠る姉の手を握った。
「ごめんね、お姉ちゃん。力になれなかった。ごめんね。」

何度も呟く理沙の声が眠りに途絶えるのを待っていたかのように美樹は翌朝、息を引き取った。
死亡宣告をした青葉先生は唇を噛み締めて
「やっと退院だね、美樹ちゃん。お疲れ様。おめでとう。」
涙声でそう呟いた。
理沙は家にいる両親に連絡し、葬式の手配をするなど気丈に振る舞っていたが、姉の遺影を選ぶため写真を眺めているうちに涙が溢れ出て止まらなくなってしまった。
翔は虚ろな目でただ呆然と美樹の死顔を見つめていた。そのまま息を止め、消えてしまいそうな姿だった。
連絡を受けた美樹の両親が到着した。父親は淡々と退院の手続きを済ませて、母親はベッドに横たわる美樹の姿を見るなり泣きながら縋りついた。
理沙や翔に声をかけることはなく、二人からも何も言わなかった。
やがて美樹の部屋だった病室がすっかり片付くと、魂が抜けたように廊下に座りこんでいた翔の前に一通の手紙が差し出された。
「最後に診察したとき、美樹ちゃんから預かってたんだ。」
青葉先生は言って、翔の横の壁に寄りかかった。
翔は手紙を開いた。美樹の弱々しい小さな文字が綴られていた。

『この手紙は、私が書くことのできる最後の手紙です。
私にこの人生を与えてくれた人たちみんなに宛ててこの手紙を送ります。

まず、お父さん。手術と入退院を繰り返し、治る見込みがないと言われたときも治療を受けるなとは一度も言いませんでした。前は冷たい人だと思ったけど、入院費の心配をせずにいられたのはお父さんが文句も言わず一生懸命働いてくれたからだよね。ありがとう。
お母さん。いつも泣いてばかりで面倒な人だと思ったけど、母親だもん。子供には健康に長生きして欲しかったんだよね。ごめんね。

でも、あなたが生んでくれたから命を掛けてもいいと思える人を好きになりました。私を大切にしてくれる人に出会いました。幸せだった。ありがとう。
理沙はいつも支えになってくれたね。私がいたから出来なかったこと、やりたくないのにやらなきゃいけなかったこと、たくさんあったでしょう。なのに、一度だって私を見捨てなかった。お姉ちゃんらしいこと、何もしてあげられなくてごめん。ありがとう。
青葉先生にはワガママばかりの面倒な患者だったね。ごめん。
先生は最高の名医だったよ。
今までお世話になりました。ありがとう。
翔さん。出会ったのも二番目、好きな人の中でも二番目だけど
思い出は翔さんが作ってくれた思い出が数も中身も一番だよ。
人のことをあんなに大切に出来る人は弱くないと思う。そういうとこ好きだよ。短い間だったけど、ありがとう。

病気になり、恋人もなく、人と比べれば苦しい、不自由な暮らしだったかもしれません。
ですが、思い返すと楽しかった日々ばかりが目に浮かぶ、身に余るほど幸せに恵まれた人生でした。
神様、ここへ生まれてきたことに感謝します。
ここで死ねることを感謝します。』

翔の涙がリノリウムの床に光った。
「僕は、もっと、彼女にしてあげたいことが、彼女を幸せにできることがたくさんあったのに。」
嗚咽の合間に漏れる後悔の言葉を青葉先生はただ黙って聞き続けた。
翔の言葉が途切れると、青葉先生は言った。
「彼女を忘れないでくれ。」
翔は頷いた。美樹が自分にそれを求めていた。悲しみと共に自分が生きた時間を忘れられてしまうことを恐れ、幸せだった時間を思い

出して笑ってもらうことを望んでいたのだ。
彼女の葬儀でその手紙は読まれた。小さな式で、親戚と近所の人間が僅かに数人参列しただけだったが、美樹に相応しい温かさが溢れる葬儀だった。
理沙は泣くまいとして震える肩を抑え、泣いてばかりの母に寄り添っていた。
父は語りかけるような目で遺影を眺めていた。成人の記念に撮った写真の美樹は嬉しそうな照れ笑いのままその視線を受けていた。
やがて棺の中は参列者の手によって入れられた花で埋め尽くされ、美樹はその中で息を引き取ったときのままの穏やかな顔で眠っていた。
旅行写真のアルバムと、一枝の桜の花が最期の別れの言葉と共に入れられた。
そして彼女は灰と煙になった。

翌年のその日。
海沿いの小さな街に薄紅の桜が咲く枝を持った、一人の男が訪れた。タクシーで山道を少し登り、目的の場所に着いた男はそこに立つ桜の木の根元に自分が持ってきた枝を差し、何も言わず両手を合わせた。
顔を上げ、吹き抜ける心地よい風に振り返るとその視線の先には海が広がっていた。
「やっと……来たよ。」
男は囁き、目を閉じた。

最期の眠り（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

これは私の友人がした恋を元にして書いたものです。
私が知る彼女の恋をこういう形にして読んでいただくことで、読んだ人の心の中にも彼女が私に残していったものを伝えられたらと思います。
何か残せたでしょうか。伝わりましたでしょうか。
感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4319z/

花咲く海

2011年12月14日23時54分発行